

二〇二〇年度 神戸市外国語大学

推薦入学試験【小論文】英米学科・第二部英米学科

次の文章を読み、設問に答えなさい。

日本人が外国語と接する時には特にその言語を自分にとってどういう意味を持つものにしていきたいのかを考えないで勉強していることが多いように思う。すると、上手い、下手だけが問題になってしまう。そうなってしまう歴史的背景もあるだろう。特に英語やフランス語など西洋の言語は、日本社会の内部での階級差別の道具として使われてきた。英語が下手だと入試に落ちて一流大学に行けないというだけのことではない。もつと漠然とした「階級意識」の演出に外国語が使われることが今でもある。最近日本のマンガを読んでいたら「このフレンチ・レストランはメニューもすべてフランス語のみ、高級な客しか相手にしない」という文章があった。外国語を習うこと、留学するということは「高級に」なること、つまり普通の人と差をつけて、国内で階級を上へ這い上がるという象徴的な意味を持っているらしい。しかも、誰が上手で誰が下手かということが確実に言えるということは、それを決定する権威が自分たちではなく、どこか「外部の上の方」にあるということである。その権威は日本で抽象化された「西洋人」の偶像であり、その権威が、自分の言葉が「上手」かどうかを決めてくれる、という発想である。それは家元制度的な発想と言うよりは、むしろ植民地的な発想だと言えるだろう。なぜなら、家元制度では師匠は組織の内部の人間だし、抽象化された偶像ではなく一応血の通ったひとりの人間だからだ。抽象化された「西洋人」を権威機関として崇めるということは、具体的な西洋出身の個人を無視するというにもなる。実際に生きている生身の西洋人は、トルコ系ドイツ人、韓国系ドイツ人、インド系イギリス人や、ベトナム系フランス人、アフリカ系アメリカ人、日系アメリカ人などいろいろなたちから成り立っているが、そういう多様性があるのは、「西洋」が差別の機械として機能しないので、生身の西洋人は無視し、自分の頭に思い描いている「西洋人」像を保持するというような状況が、ごく最近まで日本にあったような気がする。

もう二十年以上も前になるが、まだ日本に住んでいた頃、アテネ・フランセ^(注)で「車に轢かれた犬」という映画を見た。日本で暮らす西アフリカから来た日本文化研究者の話だが、彼は、日本に住んでいるフランス人たちには「アフリカには餓死している人がいるのに君は日本学なんかやっていていいのか」と言われ、飲み屋では酔っぱらった日本人に「アフリカでは人の肉を食うって本当ですか？」と聞かれ、かっとなってテーブルをひっくり返してしまう。フランス語を教えるアルバイトをしようとして広告を出すと、希望者の若い日本人女性が家に訪ねて来るが、彼がアフリカ人であるのを見ると驚いて走って逃げて行ってしまう。このシーンは、日本人が「フランス語」というものに背負わせている屈折した願望と、劣等感から来る自覚症状のない不安を鋭く照らし出しているように思った。「自分たちはアフリカと同じくヨーロッパ人が勝手に野蠻人と見なしていたアジアの人間であるが、今は金持ちになったので、そのお金で高い授業料を払ってフランス語を習うことで、野蠻人ではないことを再確認したい」と無意識に思っているのに、よりによって野蠻人と思われ続けた被害者の代表とも言えるアフリカ人がフランス語の教師として姿を現したので、あわてて逃げていったのだろう。これはつまり、日本人はヨーロッパの野

蛮観をなぜかそのまま受け入れてしまったことになる。このような妙な劣等感は、経済成長によって隠蔽されたが、消えてなくなったわけではない。日本人が野蛮人ではない理由は、革靴だけが文明なのではなく足袋も文明なのだという単純な理由からなのだが、そういう考察は省略されてしまって、日本人はお金を持っているから野蛮人ではない、という変な形で傷を癒そうとしていた時代に、わたしはまさに生まれ育ったことになる。わたしがドイツに移住した一九八〇年代には、ヨーロッパで高級品を買い漁ったり、高級レストランに行くのが日本人ばかりであることを中年以上の日本人自身が変に強調したのがたのは、それで潜在的劣等感の巻き起こすストレスが解消されたからだろう。泡立つバブルの泡銭を使って贅沢して楽しんだというなら分かるが、そうではなくて、その買物熱には、怨みを金で晴らすというような攻撃性が感じられた。その結果、ヨーロッパ中心主義を外から見て無力化するチャンス逃してしまっただけでなく、ヨーロッパ文明を消費者の文明としてのみ捉え自分たちをその一部であるという考え方が一般化し、歴史が消しゴムのカスになって机の下に払い捨てられてしまったような気がする。たとえば、最近の日本人は「アジアに行く」などと言う。わたしなどは「え、どういう意味？」と驚くが、彼らにとって「アジア」には日本が入っていないから、この言い方はおかしくないのだそう。アジアを地理的、歴史的に捉えず、経済的な単位としてとらえているらしい。

日本の劣等感を取り上げるのは時代錯誤で、今の人はそのようなことは問題にしていない、と言う人がよくいる。フランス語を学ぶのは単に楽しいから、パリに行くのは買いたいものがあるから、フランス料理を食べるのは単に美味しいから。それだけのことで、もう劣等感も怨みもどこにもない、何も難しいことなど考える必要はないのだ、と。でも、ヨーロッパ中心主義と日本のねじれた国粹主義の問題は、乗り越えられたかのように見えるだけで、実際には手つかずのまま一万円札の下に埋まっていたような気がする。経済危機の時代が、それらの問題について考え直すいい機会になれば、バブルもはじけがいがあつたと思うが、なかなかそうもいかないようだ。バブルがはじければ今度は、フランス語などの「外国語」は単なる飾りであり贅品だからやめて、本当のビジネスに役立つ英語だけやればいい、という方針に無反省に移行してしまう傾向が出てくる。それで、日本の大学は英語以外の外国語教育の予算をどんどん削っているらしい。

外国語をやることの意味について本気で考えなければ、外国語を勉強することによって逆に国の御都合主義にふりまわされ続けることになってしまう。

多和田葉子『エクソフォニー——母語の外へ出る旅』岩波現代文庫 二〇一二年より抜粋

(注) 東京御茶ノ水にある語学学校。

設問

傍線部 植民地的な発想 とあるが、このような発想に縛られることなく外国語を学ぶためには、どのようなことが必要か。具体例を挙げながら、あなたの考えを八〇〇字以内で述べなさい。